

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

探究学習の
個別化と
伴走体制の見直し

自分の経験や関心に
基づいた個人探究で、
新しい価値を創造する力を育む

島根県立隠岐島前高校

生徒の 転換点

- 自分の経験や関心を基にテーマを決めて、個人探究に取り組む
- 終日行う週1回の探究学習の日に、計画的にじっくりと活動する

その生徒だからこそ深められる テーマ設定を促す

島根県立隠岐島前高校は、2008年度から地域の課題を題材とする探究学習「夢探究」を行っている。その実践は探究学習の先進事例として全国から注目されてきたが、近年、一部の生徒に探究学習による疲れが見られるようになった。「小・中学校も地域の課題を題材とする探究学習に力を入れているため、「高校でもまた地域の課題?」などと言う生徒がいました。そのような生徒と探究学習に熱心な生徒とで「極化し、グループ活動がうまく進まないこともありました」(進路指導主事・飯野卓先生)

また、長く実践する中で、地域の課題にどう

まらず、新たな価値を創造する探究学習に発展させたいという思いが同校に生まれた。そこで23年度、2年次からの選択制とする「地域共創科」を新設。同科の探究学習は、1人1テーマで取り組む個人探究にした(図1)。

「グループ探究では、『観光客を増やす』といった、よく聞くテーマに落ち着きがちでしたが、個人探究にしたことで、生徒自身の経験や関心に基づいたテーマを設定しやすくなりました。例えば、『菜食主義の家族がいるので、肉の流通に関する問題点を調べたい』など、その生徒だからこそ深められるテーマが設定されるようになりました」(地域共創科主任・吉岡裕司先生)

加えて、個人探究にしたことで、自分が動かなければ前に進まない状況となり、生徒はより

学校概要

設立 1955 (昭和30)年
形態 全日制/普通科・地域共創科/共学
生徒数 1学年約50人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、弘前大、筑波大、金沢大、島根大、高知大、国際教養大、島根県立大、県立広島大に10人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、明治大、立命館大、甲南大、立命館アジア太平洋大などに延べ34人が合格。短大・専門学校進学7人。就職3人。



原 周右 はら・しゅうすけ
同校に着任して4年目。



地域共創科主任
吉岡裕司 よしおか・ひろし
同校に赴任して6年目。生徒部。理科(化学)。



進路指導主事
飯野 卓 いいの・たくる
同校に赴任して3年目。キャリア教育部。地理歴史・公民科(日本史)。



図1 探究学習の変革の柱

●地域共創科

●1人1テーマとする個人探究を実施

テーマを検討する際、教師は生徒一人ひとりに問いかけ、自分の経験や関心を基に「どのような新しい価値を生み出したいか」を考えさせることを重視。その結果、個別に設定したテーマに自分事として取り組むようになり、探究学習の授業が終了した後も継続して活動する生徒が多く見られるようになった。

●「地域共創DAY」を週1回設定

終日（6時間）を探究学習に充てる日を週1回設定。長時間の調査や作業などが可能になったことで、生徒の活動の幅が広がるとともに、じっくり取り組めるようになった。

●伴走体制の見直し

1つのゼミに、教師と非常勤講師、一般財団法人島前ふるさと魅力化財団の高校魅力化コーディネーターの計3人を配置。一緒に答えを探するという姿勢で生徒に伴走する。探究学習の評価は、生徒自身の振り返りによる自己評価と、担当教師の評価を組み合わせ、対話を通してすり合わせた上で行っている。

●普通科

●「教科」と「地域」を掛け合わせたテーマ設定

2025年度から、教師が担当教科の専門性を生かし、「地域のよさを英語で表現する」「地域の作物の栄養素を分析する」など、教科と地域を関連つけた多様なテーマを提示。生徒はその中から関心のあるテーマを選び、その探究学習に取り組む中で、生徒が自分の関心を見いだして探究学習を深める構成とした。

図2 生徒の声

探究学習を続ける中で目的が自然と変化し地域共創科3年（愛知県出身）



学校にサッカー部がないため、私は探究学習のテーマを「本校にサッカー部を創る」にしました。まず子どもたちにサッカーの楽しさを知ってもらおうと、小学校でサッカー教室を開こうとしましたが、小学校からよい返事をいただけませんでした。先生やコーディネーターと相談し、自分の希望ばかりを伝えていたことに気づきました。そこで私は、小学生と一緒に遊び、心を通わせられるようにしました。子どもたちや小学校の先生と少しずつ打ち解けていき、再びサッカー教室の開催を提案すると、2校で定期的に開催させてもらえることになりました。

子どもたちが楽しそうにボールを追いかける姿を見ると、自分の活動が人の役に立っていると実感するようになり、私の探究学習の目標はいつしか「サッカーを通じた地域の活性化」に変わっていきました。自分が島を離れてもサッカーが地域に根づくように、卒業までに親子フットサル大会を開催しようと頑張っています。

※図1、図2ともに学校資料を基に編集部で作成。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

主体的に活動するようになった。教師の声かけも、個々の生徒に一層寄り添うものになった。『「あなたは、隠岐諸島をどんな地域にしたいの？」などと、本人に直接働きかける声かけをしています。生徒は自分が答えるしかないため、おのずと思考は深まります』（吉岡先生）

個人探究でも生徒間で相談や協力が気軽にできるよう、「ビジネスの視点からプロジェクトを設計する」「人間関係の構築に重点を置く」など、活動の方針別に5つのゼミを設け、生徒はいずれかのゼミに入る形とした。各ゼミには教師1人と非常勤講師、コーディネーターの計3人を配置し、それぞれの視点から生徒に問いかけ、一緒に考える伴走型支援を行っている。3人体制にすることで教師の負担を軽減するとともに、生徒が多様な大人との対話を通じて視野を広げやすくなるというねらいもある。

自分で進めるからこそ探究学習が自分事になり、進路選択に結びつく

地域共創科では生徒の活動の幅を広げようと、終日を探究学習に充てる「地域共創DAY」を週1回設けている。それにより、他の島を訪れたり、対応できる時間が限られる人に話を聞きに行ったりすることができるようになるとともに、生徒の計画実行力も養われていった。

「1日6時間も探究学習に取り組めることとなると、事前に活動計画をしっかり立てる必要があります」（飯野先生）

「この日までに訪問の準備をすります。生徒は『この日までに訪問の準備をすります』といった見通しを持ち、活動計画を細かく立てるようになりました」（一般財団法人島前ふるさと魅力化財団教育魅力化事業部高校魅力化コーディネーター・原周石氏）

そのような体制で探究学習を進める中で、以前よりも生徒と地域とのつながりが格段に深まっていることに気づいたと、飯野先生は語る。

「自分の経験や関心に基づいてテーマを設定しているため、『この人に会いたい』といった強い思いが生まれ、それが行動につながり、出会いや学びの機会が広がっていきます」

そして、自分で責任を持って活動を進めるからこそ、探究学習が自分事化していくという。

「以前は、探究学習のゴールをイベントの実施や発表と捉える生徒が少なくありませんでしたが、今は、その先にどのような新しい価値を生み出すことができるかを考えるようになりました（図2）」（原氏）

24年度の地域共創科卒業生20人のうち、14人が探究学習のテーマに関連した進路を選んだ。

「例えば、海洋ゴミについて探究する中で出会った大学教授の下で研究したいと、その教授の大学に進学した生徒がいます。そうした生徒の志望理由書は、『自分の言葉』で書かれました。これからも、『生徒が自分の持ち味を存分に発揮できているか』という視点を常に持って、新たな価値を創造する探究学習を目指していきます」（飯野先生）